

# ことばの意味変化のプロセス

## — 自家撞着の語 —

水野光晴

ことばは生きもののように、発声や綴りだけでなく、その意味も古くから無数の変化を重ねてきたし、今もなお変化しつつある。すなわち、あらゆる単語にはそれなりの由来があり、そのあるものはしばしば非常に驚くべきものであったり、想像を絶するものであることがあるため、一旦その楽しみを味わうと病膏盲の境地に入ることになる。

例えば近頃の英語教育ですっかり人気のなくなった‘grammar’という語は、ギリシャ・ローマ時代では「ギリシャ語やラテン語およびそれらの文学の研究」を意味していた。しかし、古典ラテン語以後は「ことばの言語学的研究、文法 (glomeria)」の意味になった。さらに、中世のイギリスでは、ラテン語文法は、一般大衆の理解を超える神秘的な学問であり、神秘的な美しさ、心を奪う魅力があった。そこで、‘glamour (または glamor)’に「神秘的な魅力、性的魅力、魔力」という意味が生じたのである。また、ウォルター・スコットは、スコットランド方言であったこの語を文学に取り入れた最初の人であった。なお、この語には日本語で用いられる「肉体美人」の意味はない。

また、最近の医学技術の進展で、臓器移植が盛んになっているが、臓器の提供者は依然極めて少ないことがその業界の問題となっている。ところで、その提供者を指す英語は‘donor’であるが、その語源はラテン語の‘dōnum’「贈り物」→‘dōnāre’「贈る」から古代フランス語の‘donner’→中世フランス語の‘donneur’「寄贈者」からきている。他方、日本語の旦那はサンスクリット語のdānā「寄贈」+pati

「主人、君主」からきたdānā-pati(檀那波底)の省略で、その意味は「寺のために金品を施す信者、施主」であった。その後意味が変化して「ひいき客、夫、主人」という意味になった。さて、この‘dānā’と‘dōnum’の2語はともに、印欧言語のdō-「与える」から来ており、同じ語源のことばであることが確認されている。いずれにせよ‘donor’と「旦那」のように、数千年前にインドで使われていた言葉が、今や一方ではヨーロッパの端のイギリスで、他方ではアジアの東端の日本で用いられていることを考えると、言葉の不思議な縁を感じざるをえない。

同じような経緯をたどった語に‘war’「戦争」と‘guerrilla’「ゲリラ」がある。‘war’の語源は西ゲルマンのフランク語の‘waddi’「約束」→‘werra’「争い」が古代北フランス語で‘wege’→‘werre」となり、それが古英語に入って中世に‘warre’→‘war」となって今日の英語に定着した。他方、古代北フランスでは、ゲルマン語口語の/w/音が極端に強調されて/gw/となり、中世には/g/となった。それゆえ、古代仏語(中央)では‘waddi’が‘gwage’→‘guerre’「戦争」となり、スペイン語に入って‘guerra’となった。その後ナポレオン戦争でナポレオンがイベリア半島を侵略したとき、スペイン軍は盛んにゲリラ戦法を用いた。このスペイン語の‘guerrilla’は‘guerra’に指小辞-illaがついたもので「小さな戦争」を意味したが、その戦争を報告したウエリントン公の報告書(1809)によって英語に導入され世界的な市民権を得ることになった。このようにして‘war’と‘guerrilla’は同じゲルマン語の祖先から生まれて、さまざまな

国々を巡りながら、それぞれの土地柄の色合いに姿を変え、最終的には英語において再会したことになる。さて、ことばの意味の変化にはいろいろなタイプがあって一筋縄ではいかないが、その意味変化が意図的に行われたものと、日常の会話のやりとりの中で徐々に生じたものがある。そこで文献からそれらのタイプを分類すればつぎようになる。

(1) 品詞転換 (Functional Shift) ある品詞がそのままの形で、他の品詞になり、それにとまって生じた意味変化。

audition「オーディション→審査する」、finger「指→指でいじる」、influence「影響、勢力→影響力を及ぼす、感化する」、star「星→スター(として出演する)」、figure「姿→人物、数字、想像する、計算する」、flower「花→花が咲く」、number「数→数える」、word「語→言葉で話す」。

(2) 語音連想 (Phonetic Association) ある類似の語の連想で生じた意味変化。

motherly「母のような→やさしい」、bull「雄牛」→「あばれん坊」、wolf「オオカミ→残忍な人、貪欲な人」、change「変化→交替、小銭、釣り銭」

(3) 省略化 (Omission) 語形の一部を省略して使用することによって生じた意味変化。

carrum「二輪馬車」→car、newspaper→paper「新聞」、private soldier「公的階級のない兵卒」→private「兵卒」、portable camera obscura「携帯用暗室」→camera「部屋→カメラ」、disport→sport、photograph→photo、omnibus→bus、caravan→van、pianoforte→piano、influenza→flu、taximeter cabriolet→taxi(or cab)、zoological garden→zoo、exposition→expo。

(4) 共感法 (Synesthesia) ある音からある色を感じるように、ある刺激によって生じる別種の感覚による意味変化。

sweet「甘い(味)→良い(香り)、心地よい(音、声)」、warm「暖かい(温度)→暖かい(色)」、loud「高い(音)→派手な(色、柄)」、clear「はっきりした(形

→明瞭な(音)」、dark「暗い(明度)→黒い、濃い(髪、肌、眼)、陰気な(顔色)」

(5) 代用法 (Substitution) その語の指示物が変化しても以前の語で代用すること。

wagon「荷車→小型トラック」、horn「角→(楽器)ホルン」、cavalry「騎兵隊→機甲部隊」、bench「ベンチ→判事」、captain「首領→船長、機長」film「薄膜→映画」

(6) 特殊化 (Specialization) 上位概念の語を下位概念の特定のものに用いること。

hall「建物→広間、玄関」Bible「本→聖書」day「昼→一日」、dome「家→屋根、円天井」、cloth「布→衣服」、poet「作る人→詩人」、wife「女→妻」、spinster「糸を紡ぐ人→未婚女性」、worm「爬虫類→虫」、room「空間→余地→部屋」

(7) 一般化 (Generalization) 下位概念のある語を一般化して用いること。

bar「棒→カウンター、食堂」hand「手→人手、人」、carry「車で運ぶ→運ぶ」、dish「皿→食器、料理」、companion「共にパンを食べる人→仲間」、board「板→食卓→委員会」

(8) 抽象化 (Abstraction) 明確な形を持った対象を指示する語を、それと関連する抽象的な意味に適用する意味変化。

pen「ペン→文筆」、head「頭部→知識」、sword「剣→軍事力、戦争」tongue「舌→言語、ことば」、cradle「揺りかご→幼児」、jail「刑務所→拘留」

(9) 具象化 (Concretization) 抽象的意味の語を関連ある具体的な語に適用する意味変化。

curiosity「好奇心→骨董品」beauty「美→美人」、love「愛→愛人」、honour「名誉→勲章、表彰状」authority「権威、権力→権威者、当局」

(10) 語義上昇 (Elevation) 語義が上位の意味に改善されるような意味の変化。

fortune「偶然、運命→幸運」、knight「従僕、少年→騎士」、terrific「恐ろしい→素敵な、すごい」、minister「召使→大臣」、guest「異国人、敵→客」

(11) 語義下落 (Degeneration) 語義が下位の意味に悪化するような意味の変化。

maid「乙女→女中」、homely「家庭的な→不器用な」、terrible「おそろしい→ひどい」、villain「村人、農民→悪者」、chef「料理長→コック」、silly「幸福な→無邪気な→頭が弱い→愚かな」

(12) 反語法 (Irony) ある語がもつ本来の意味とは逆の意味で用いる場合。

fine「立派な→ご立派な→酷い」、nice「無知の→単純な、つまらない、難しい→繊細な、上品な、素敵な」、silly「愚かな→頭が弱い→無邪気な、幸福な」

(13) 類推法 (Analogy) ある語の意味を類似のものへの拡張から生じた意味変化。

star「星→花形、人気者」、crane「鶴→起重機、クレーン」、eye「目→ジャガイモの芽針の目」、key「かぎ→手がかり、重要人物」、summit「山頂、頂上→首脳会議」

(14) 換喩法 (Metonymy) 語の指示対象に随伴するもので代表させる場合。

china「中国→陶器」、sandwich「サンドイッチ伯爵→サンドイッチ」、White House「大統領官邸→米国政府」、canvas「帆布→絵画」、crown「王冠→帝王、君主」、cross「十字架→キリスト教国、キリスト教」、japan「日本→漆器」

(15) アンダーステートメント (Understatement) ある事実を控えめに言うことにより表現効果を強める場合。

pond「池→海、大西洋」den「洞穴→こじんまりした仕事部屋、安全地帯」

(16) 婉曲法 (Euphemism) 本来の語義を遠回しに表現する手法から生じた意味変化。

fairy tale「童話→嘘」、pass away「立ち去る→「死ぬ」、natural child「自然の子→私生児」、toilet「化粧台→トイレ」、undertaker「引受人→葬儀屋」、naive「純真な→単純な、幼な、だまされやすい」、uncle「おじ→質屋、連邦捜査官 (Gメ

ン)」

(17) 誇張法 (Hyperbole) 語義を誇張して表現する手法から生じた意味変化。

skyscraper「空をこすもの→超高層ビル」、adore「崇拜する→大好きである」

さて、10月も半ばを過ぎてコスモスが秋風にゆれる頃になった。このコスモスという語には、「宇宙」という意味もあるがなぜだろう。一説には、かつてギリシアのピタゴラスがその完全な秩序と調和をもった宇宙を‘kosmos’と呼んだことから‘cosmos’に「宇宙、秩序、調和」などの意味が定着したのである。他方、18世紀末(1791)にスペインの王室植物園長カバニレス神父がメキシコから運ばれた花にその優美な葉から「コスモス」と命名したことからその名がついた。このように一見全く無縁と考えられる意味が一つの語に定着することもある。

また、花を意味する英語はフラワーであるが、‘flower’と‘flour’は同音語である。これも実は、1300年頃まで「花、最良部、小麦粉」を意味する語を‘flour’又は‘flor’と綴っていたのであるが、1349年頃から、‘flower’の綴りが現われ、それ以後‘flower’と‘flour’は無差別に用いられるようになった。しかし、その後1830年頃から‘flour’が現在のように「小麦粉」の意味に限定されるようになったのである (BDE)。

ことばの意味の変化は、上記のルールにもとづいて意図的に生じるばかりでなく、日常会話の中でも自然に少しづつ起こっている。なかでも驚くべき変化は反語法によるものであろう。たとえば、‘fast’には本来「固定した、しっかりした、速い」などの意味があったが、「速い」→「手が早い」→「淫らな」→「だらしない」と全く逆の意味に転化してしまった。同様に‘nice’も上記のように自家撞着的な意味を抱えているので慎重にならざるを得ないと自戒している。